

## ○障がい児・者の住まいへの建築的対応について

～フィンランド視察を通じて～

### <視察の目的>

知的障がい児・者の方のための住まいを設計するにあたり、様々なご利用者の状態に対してどのようなサービスが行われているのか、またどのような建築的工夫がなされているかを見るため、福祉先進国の事例をみるべく、平成24年2月、フィンランドを訪問しました。今回視察した事例は、次の2件です。

1. リンネコティ **Rinne koti** (フィンランド、エスポー)  
300人のご利用者が住まわれるユニット型施設  
特に、強度行動障がいの方の住まいについての建築的な対応を見る。
2. アカゲラの家 **Käpytikka-talo** (フィンランド ヘルシンキ)  
都市の中での軽度知的障がい者の方の住まいと設立までの取り組み

今回はこの2施設の施設長・職員の方からお話を伺うことができました。

日本とは制度・環境が異なる国で、知的障がいの方の住まいをどのようにつくっているか、視察してきました。

### <視察内容>

#### ○フィンランドの建築について

フィンランドは「森と湖の国」と言われ、特に森林については、所有者が森を守る義務があり、樹木本数が管理されています。所有者は伐採すればその分だけ植樹をおこない、森林を守っています。

建築においても、木材が好まれ、内装等に木を多用することが多いとのこと。

フィンランドの建築は、基本的に冬を基準につくられています。サウナはフィンランド発祥ですが、人口の半分程度の数のサウナが全国にあるそうで、どの建物にも必ず設置されていました。日本の浴槽と同じような感覚と言えそうです。

長く厳しい冬の中で住まうため、断熱性を重視しており、開口部も三重サッシ、二重ドアが使われています。積雪量が多いため掃き出し窓はほとんどなく、腰窓の部屋が多く見られました。その代わりに、トップライトが随所に見受けられ、光を取り入れる工夫がされていました。暖房は、全館温水式床暖房やパネルヒーターを用い、室内はかなり暖かく保たれていました。

## 1. リンネコティ

1つ目の視察先であるリンネコティでは、急きょ修理部門の方が案内して下さることになり、建築面での話を詳しく聞くことができました。また、当初は予定していなかった建物まで見学させていただきました。

リンネコティは、約 500 ヘクタールの広大な敷地内に約 50 棟の施設が点在している居住施設です。敷地内には、浄水場や発電所も備えられており、ある程度施設内で完結できる設備を持っています。敷地内には給湯配管が整備され、各施設の給湯・床暖房に利用されています。

こちらでは、精神障がい者の居住棟・自閉症（強度行動障がいも含む）の方の居住棟・重度心身障害児の居住棟を視察しました。

各居住棟は少人数での居住単位（ユニット）で構成され、利用者の状態に対応しやすいプランになっています。水周りは他ユニットと共有できるようになっており、職員の方の動線が合理的になるような工夫もありました。建物はスタッフの方の意見を取り入れて改修を重ねており、建物を変化させていくことで利用者の変化に対応しているとのことでした。

建築材料においても強化ガラス・アクリルの採用や、壁のプラスターボードにファイバーネットを下貼するなど、強度に対しての配慮がされていました。また、建具枠のチリを小さくして出っ張りをなくす、腰板を貼るといった、壊されにくいような工夫もされていました。カバー付き TV 台等、日本と共通している箇所も多くありました。ブラインド内蔵窓や換気窓を分離して設ける等、設計の上で参考となる箇所がありました。

建物全体の雰囲気としては、木材が多用されていて、家具やカーテン等にカラフルな色を使う等、住宅の様な楽しめる雰囲気作りをしていました。

### <精神障がい者棟>



外観



談話コーナー



ダイニング



リビング

強度行動障がいの方の住まいでは、物を極力置かないようにしているため、他の棟に比べるとすっきりした印象でした。天井やドアなどに、破壊行為に対して修理を重ねてきた跡がみられました。

<強度行動障がいユニット>



外観



リビング



居室



はがされた天井

重度心身障がい児棟では遮音材（木毛セメント板・吸音パネル）を内装材として利用したり、ドアの開きに配慮して雁行した壁面の廊下となっていました。

<重度心身障がい児棟>



外観



リビング



居室前廊下



居室天井の吸音パネル

施設は全体的に破損している箇所は少なく、優しい色調で居心地のよい環境を自然に作り出していました。

また敷地内に営繕部門を設置してあり、建築資材保管庫・家具修繕工房・鍵制作工房などにより、各居住棟のメンテナンスを迅速に行えるようになっていました。これにより、建物の状態・居住環境が心地よく保たれ、利用者が不安定な状態にならないように配慮されていると感じました。

<営繕部門 修理工房>



## 2. アカゲラの家

2つ目の視察先のアカゲラの家では、建物が完成するまでのいきさつを含めて、お話を聞くことができました。先進的なプロジェクトをやり遂げたというのも納得の、やり手のビジネスマンのような施設長でした。また、家具を始めとしてデザイン面でこだわりが多く感じられる建物でした。

アカゲラの家は、知的障がい者の方が見守りを受けながら自立した生活を送る居住施設（マンション）です。居住者の方は軽度の知的障がい者の方で、全員が仕事を持ち、月々の家賃を支払って住んでいました。一般のマンションと異なるのは、1階にサポートの為のスタッフが常駐している点、開放的な共有スペースがある点と言えます。共有スペースは一般の方にも貸出しており、地域とのつながりも重視していました。

知的障害の方が、社会とのかかわりを持ち続けられる環境に住むという願いから、敷地は都市の中にしたとのことでした。また、保護者の方がいなくなっても、自立して住み続けることができる環境を建物とサポート体制の両方からつくっていました。保護者の方の金銭的負担を一切必要としなかったこのプロジェクトはヘルシンキ市でも先進的な事例であるとのことでした。



外観



共有リビング



共有クラブルーム



居室リビング・  
ダイニング



居室テラス



居室ベッドルーム

<まとめ>

今回の視察は、利用される方の状態が分からない中でどのような建物をつくっておくべきか、また、破壊行為に対して建築的な対応をどうしたらよいか、という2つの点に関して、何らかのヒントを得ることを目的として始まりました。

視察を通して一番印象的だったのは、1つ目の視察先（リンネコティ）で建物を使いながら細かな修理・改修を重ねていくことで、良い環境を保っていたことです。敷地内に修理工房があり、小さな修理にもすぐ対応する体制となっていました。利用者が落ち着き、居心地良く感じる環境づくりを継続して行っている姿勢を感じました。また、メンテナンスのしやすさや壊されにくさといった観点から、施設の特性に合わせて材料や形に工夫がみられました。

2つ目の視察先（アカゲラの家）は、明るい雰囲気の内装や家具等、インテリア雑誌に出てきそうな雰囲気の建物でした。エントランスを長くとり、居室内はドアのないつくりとする等、入居者の方の特性を踏まえた上で、施設らしさを感じさせないデザインとすることに成功している建物でした。

訪れた施設に共通していたのは、職員さん等の意見を取り入れ、建物や計画を改善していくという点でした。また、知的障がい者の方が訓練を続けて、できるようになることが増えていく可能性をあきらめないこと、つまり建築で利用者の行動を制限するという環境づくりでないことが実践されていました。

今回の視察では、日本での施設と共通する点、異なる点を始めとして、実際に見て初めて分かることが多くありました。今回の視察で得られたものを、今後の設計に活かしていこうと思います。

岩崎直子 丸川景子